

現地本部充実への新たな試み ～プレハブ仮設事務所の設置～

4月18日、石巻赤十字病院の敷地内に救護班のためのプレハブ仮設事務所を設置、現地の熊本本部機能を移設した。このプレハブは三協フロンテア(株)からレンタルしたプレハブユニット(5.4m×2.3m=7.5畳程度)2棟を連結したもので、九州から陸送し、石巻赤十字病院の駐車スペースに組み立てた。

東日本大震災の直後から、熊本のチームは自己完結型の救護体制で石巻に入った。大型の機材を40時間かけて陸送し、食料や衣類、燃料を大量に輸送した。到着後すぐに大型テントを立ち上げ、資機材を収納、暖房を入れて現地本部とした。しかし積雪には耐えたテントだったが風には揺らされ、内外の温度差から発生する結露にも悩まされた。暖房が切れてしまった朝にはテント内にツララが出来た。「寒くて眠れなかったことも」。南国九州に住むスタッフには東北の早春はまだ寒く厳しい環境だった。

震災12日後の3月23日に視察で石巻入りし救護班のテントに泊まった一二三倫郎副院長と村岡隆事務部長は想像を超える厳しい環境に驚いた。「助ける側の態勢が整っていなければ、十分な救護活動は行えない」という考えから、いち早く(3月27日)宿舎をテントから旅館・ホテルに移し救護スタッフの負担軽減を図った。また「熊本のテントはオリジナルで、頑丈さでは自信を持っていたが、風で飛ばされるわ、結露は出るわで、コンピュータや電話などの精密機器にもよくない」(村岡部長)と帰熊後すぐに仮設の事務所を探した。その結果、今回のユニット式のアルミプレハブが候補に上がった。

プレハブユニットは震災の影響で需要が急増していたため関東以北にはなく、九州にだけ在庫があった。4月1日に三協フロンテア(株)の熊本出張所と打ち合わせを行い、14日に発注した。その間、当院にプレハブユニットを



プレハブを1棟ずつトラックで搬入



クレーンで設置場所に降ろされるプレハブユニット



ユニット2棟を連結して熊本班の現地本部が完成

運び込み、実際に職員が組み立て、石巻に持ち込めることを確認した。九州（八女郡広川町の営業所）から仙台の営業所へ1棟1.7トンのプレハブユニット2棟とキッチンユニットを運び、18日午後石巻赤十字病院に運び込んだ。営業所スタッフが組み立て、中の電気配線は当院のスタッフがを行い、事務所は40分程度で完成。ファンヒーターの暖房が格段に効果を発揮し、救護員からは「テントと違って暖かい」と好評。悩まされ続けた風の音からも解放された。



他チームとのミーティングにも活用した

現地本部機能がプレハブに移ったのは、熊本から運び込んだシャワーユニットや発電機など不要となった機材を撤収した時期で、石巻赤十字の正面玄関前に設置していたテントも資機材をプレハブに移転した後、撤去した。以後、5月末に熊本日赤の単独救護が終了するまで、資機材保管を兼ねた現地本部としてだけでなく、自衛隊など他の救護チームとのミーティングなどにも活用され、単独派遣が終了する際に現地の営業所に返却された。

プレハブの事務所は日赤本社の目にも留まり、心のケアチームの事務所として日赤本社が新たに調達、4月25日に石巻の熊本現地本部のそばに設置した。「今後はプレハブ設置が主流になるかもしれない」（村岡部長）。

1995年の阪神淡路大震災の際に村岡部長は救護活動に参加した経験があった。「着の身着のまま現地へ向かい、全国から集まった救護のための人員と合流した。近くの小学校は避難所になっていて、救護に行ったスタッフの寝る場所がない、急遽ビルの会議室を借りてしのいだ。そこに放送機材しか持たないテレビのクルーが来て、一緒に我々のカップ麺を食べた」（村岡部長）。

特に街が崩壊し、広い範囲で道路・鉄道・電気・水道・ガス・電話などのライフラインが寸断されて全く機能しなくなった東日本大震災の状況では、衣食住と活動のための機材を備えた自己完結型のチームでなければ、満足な救護活動は行えない。また救護スタッフは、衣食住が被災者と同じ環境では体力も気力も急速に萎えてしまう。1日の中で救護を終えた後はきちんと休息を取らないと次の日からの活動を続けられない。

さらに災害の救護活動をバックアップする態勢も不可欠で、現地の状況に応じてどこまで補給できるかも重要。82日間（日赤熊本の単独派遣）の長期に及んだ救護活動の中で、現地からの要請に応じた医薬品や救護要員の生活用品、ガソリンなど燃料を輸送。このほか特に救護班から要望のあった心のケアのための画用紙やぬりえ、ゲーム、救護スタッフのための安眠グッズなども送った。

救護活動が長期化するとなおさら、派遣した要員の持続力を維持するための、送り出す側の対策が重要になってくる。ロジスティクス（兵站）がどこまで出来るかで、救援のあり方も変わっ

てくる。現地で懸命に活動する救護スタッフと被災地の状況を少し離れた目線でとらえ、そこからいろんなアイデアが出てくる。現地の要望にこたえ、さらに派遣要員の生活環境の整備も図る方策、そのひとつが要員のための宿舎の確保であり、プレハブの仮設事務所だった。